



若き近代国家が日本海海戦に勝利するまで

# 帝国海軍 発展の航跡

日本海海戦の勝利は明治維新から40年も経っていない若々しい近代国家にもたらされた。新興日本が世界一流の海軍を育て上げるに至ったのは、まさに奇跡的な偉業といっていだらう。しかし、強大な国力と広い領土を持っていた帝政ロシアに対して、当時の日本は極東の小国に過ぎず、政府の台所事情も心許ないものであった。

大日本帝国海軍の発展は、血の滲むような国民の忍苦に支えられたものでもあったのだ。

文-平間洋一(元防衛大学校教授)

## 進まぬ海軍軍備と日清戦争

明治2年の官制改定で兵部省が設置された時の海軍は、軍艦3隻2,500トンにすぎなかった。明治5年には「皇国日本は海中に孤立し、西欧の耶蘇教(やそきょう)国は耶蘇教により支配しようとしている。英国は海軍を盛大にして今日の繁栄を得た」として、軍艦200隻、人員1万2,500人を建設すべきであるとの「大ニ海軍を創設スベキノ議」が兵部省から太政官(総理大臣)に提出されたが、戊辰戦争などの内乱もあり財政的に苦しくほとんど進展しなかった。明治15(1882)年当時、わが国は朝鮮問題をめぐって、いづ

れ清国と対決しなければならぬ情勢に置かれており、明治天皇から地方長官と諸省庁長官に対し、租税の増加と軍備拡充の勅語を下した。

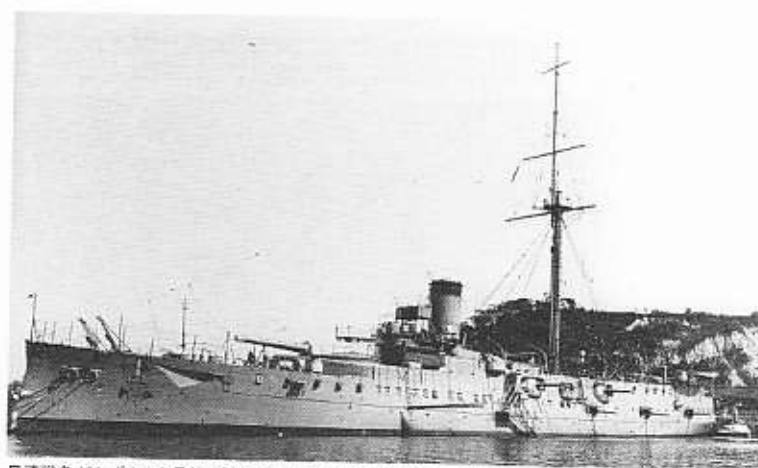
明治16年12月には2,400万円が明治16年度以降8カ年の継続事業として計上された。これが政府の歳出予算に「軍艦建造費」が組み込まれた最初であった。しかし、当時の歳入では不可能であり、明治19年に1,700万円の海軍公債を起し、計画変更を行って、新たに艦艇54隻、6万6,300トンを製造することになった。いわゆる第1期軍備拡張計画である。財政不如意を知った天皇が明治20年3月14日に建艦の勅語を下し、次い

で7月1日には海防費補助として宮廷費から30万円を下賜されると、感激した国民から203万8,000円の海防献金があった。

しかし、その後も、海軍の増強には紆余曲折がつづいた。清国との緊張の度合はますます強まっていたが、明治21(1888)年には第2期軍備拡張計画案が政争から否決され、翌々23年提出の計画案も、閣議で容れられなかった。さらに24年の第2議会でも要求全額削除、つぎの第3議会、第4議会でも政争から否決されてしまった。この状況を受けた明治天皇は、明治26年2月10日に国防は「紛議ノ因タルベカラス」、国防を軽視すれば「百年ノ

悔ヲ遣サム」として、向こう6年の間、宮廷費から30万円を下賜し「製艦費ノ補足」に当て、文武の官僚は六年間俸給の10分の1を製艦費として国庫に納めよ、との詔勅を下した。こうして政争は終止符を打ち、第2期海軍拡張計画が成立した。しかし、2年間の建艦予算の否決から戦艦八島、富士、巡洋艦明石、通報艦宮古は戦争に間に合わず、水雷砲艦龍田は戦争が始まったため、回航中にアデンでイギリスに中立条約により抑留され、チリ海軍から購入したエスメラルダ(後の和泉)も戦争に間に合わなかった。

しかし、日清関係がいよいよ緊張した明治27年7月には、日本海軍の総兵力は軍艦31隻、水雷艇24隻の計55隻、総排水量6万1,400トンになっていた。この中には32センチ砲を搭載し砲力では定遠に対抗できる砲艦松島、橋立なども含まれていた。実戦部隊の主力の常備艦隊に



日清戦争がわずか1カ月後に迫る1894年6月末に就役した三景艦の1隻「橋立」。3年後には国家予算の50%以上を軍事費が占める、今日では信じ難い状況だった。なお、同艦は補助的な任務ながら日本海軍戦時も活躍している。

は、旗艦松島ほか軍艦16隻、水雷艇等の総勢24隻が編入された。さらに開戦に備え2,000トン以下の中・小型の低速艦で

を残すと、中国に返還するよう勧告してきた。驚いた日本は米国や英国などに相談したが、英米ともに仲介を拒否し、日本に

■表①

国家予算・軍事費の推移(単位・千円)

年度	総歳出	軍事費	軍事費の比率
明治28年	91,632	29,440	32%
明治29年	203,458	98,106	48%
明治30年	249,547	137,421	55%

■表②

日露海軍の兵力の比較

区分	トン数	戦艦	1等巡洋艦	2等巡洋艦	駆逐艦	水雷艇
露国 旅順艦隊	19万	7	4	7	27	10
露国 バルチック艦隊	26万	11	12	0	0	0
日本海軍	26万	6	6+2	12	27	19



連合艦隊参謀秋山真之の兄、秋山好古が手懸にかけて育成した日本陸軍騎兵隊の絵。ロシア陸軍のクロバトキン大將は「日本兵3人にロシア兵1人で間に合う」とまで豪語した。陸軍の兵力差は海軍以上だったが、日本陸軍はよく奮戦し、重要局面において勝利した。写真/潮書房

西海艦隊も編成され、19日には常備艦隊と西海艦隊を統一指揮するため、日本海軍最初の連合艦隊が編成された。

明治27年の黄海の海戦では巡洋艦浪速・吉野などが運動力と砲力を發揮して戦いを有利に進めた。しかし、期待した松島、敷島、橋立の32センチ砲はほとんど発砲できず定遠・鎮遠を撃沈できなかったことから、大艦巨砲の艦隊と軽快・優速の遊撃艦隊の必要性を実感、それが六六艦隊の整備へとつながった。

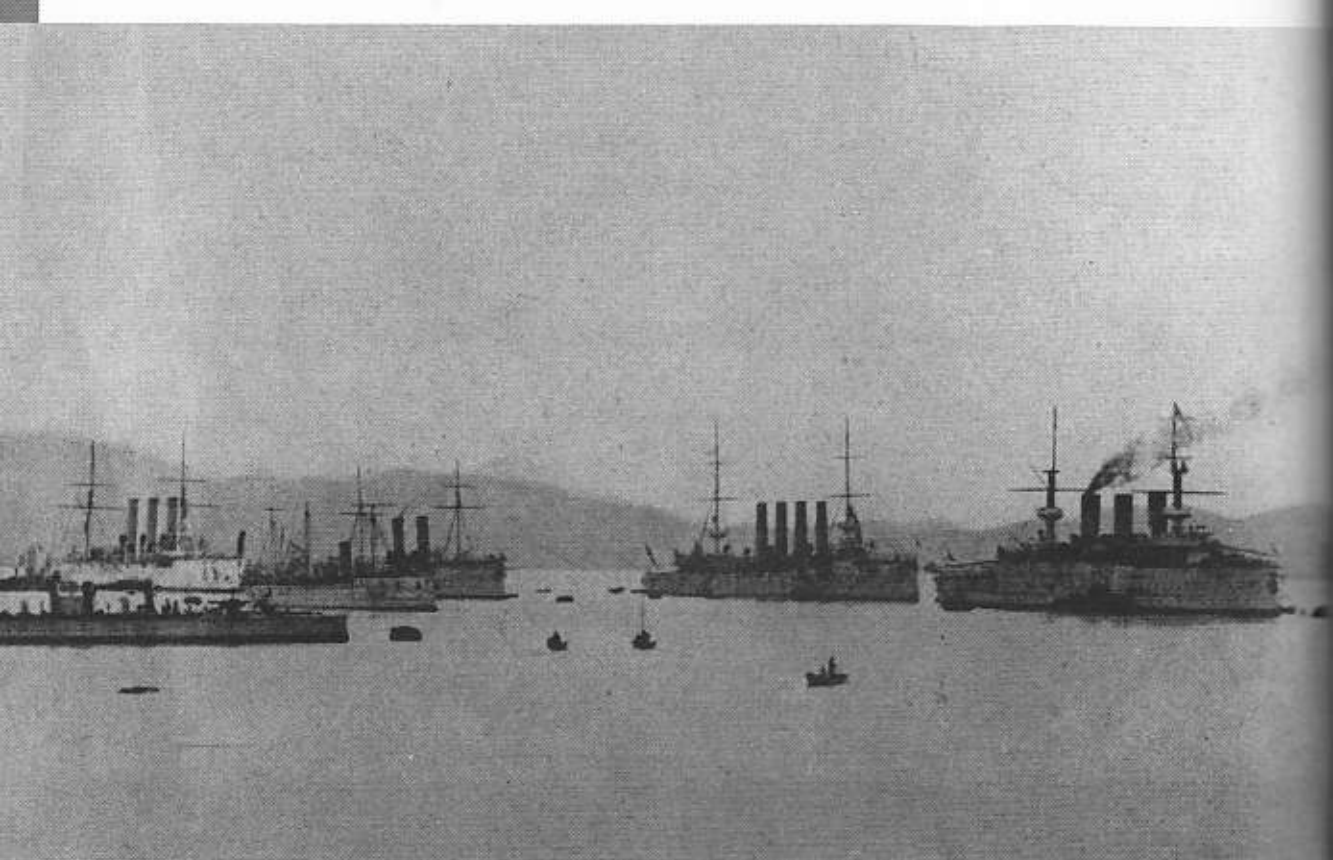
#### 臥薪嘗胆の建艦計画

日清講和条約が調印された6日後の明治28(1895)年4月23日に、独露三国の公使が外務省を訪れ、遼東半島の領有は朝鮮の独立を有名無実化し東洋平和に禍根

同情を示したのはイタリアだけであった。

列強に見放され国力や軍力にも欠けた日本は、勝利の美酒も一瞬に冷め、天津沖に集結した独仏露三国軍艦の大砲の前に、やむなく遼東半島を返却した。この屈辱を胸に日本国民は「臥薪嘗胆」をスローガンに、富国強兵を期し増税に耐え、その後10年に及ぶ軍備増強を始めたのであった。この勧告を受けた翌明治29年の予算には、日清戦争の賠償金も加えられたが、一挙に2.2倍に増額された。それは税金も増加したことを意味していた。しかも、軍事費は3倍、その翌年には4倍に跳ね上がった(表①)。しかし、当時の国民は、この大軍拡を当然の国策として認めたのであった。そして、明治28年12月には第1期拡張7年計画(明治29-35年)として9,500万円、翌29年には第2期拡張計画として、10年間(明治29-38年)に2億1,300万円の予算で、軍艦103隻、15万3,000トンを建造する軍備拡張計画を国会は可決した。

明治35(1902)年12月には三笠が完成し、戦艦群はすべて整備された。八雲、



旅順に碇泊中のロシア艦隊。バルチック艦隊が加われれば我が兵力差は懸絶してしまうため、同艦隊の東洋回航前に旅順艦隊を打ち砕くことが、連合艦隊にとって不可避の戦術となった。写真/潮書房

替手をはじめとする装甲巡洋艦部隊も34年3月には完成、予定の六六艦隊は陣容を整え、明治37年の日露開戦時には軍艦57隻、駆逐艦19隻、水雷艦76隻、合計26万5,000トンが整備された。

しかし、対するロシア海軍は東洋所在の太平洋艦隊だけで戦艦7隻、1等巡洋艦4隻ほか大小72隻、19万3,000トンを保有し、さらにバルト海、黒海方面に戦艦11隻を含む約60隻、計45万トンと、ヨーロッパの艦隊を加えれば2倍の兵力を保有していた(表②)。

## 日露両国の兵力と勝敗の判断

このように日露に兵力の格差があるため、ルーズベルトに和平の仲介を依頼するために派遣される金子堅太郎に、山本権兵衛海軍大臣は「先ず日本艦は半分は沈没させる覚悟だ。それでも勝利を得ようと良策を案じている。これ以上は君に話すことはできない」と語っていた。

開戦8カ月前の5月に来日し、陸軍戸山学校などを視察した陸軍大臣のクロバトキン大将は「日本兵3人にロシア兵は1人

で間に合う。われわれは13日間に40万の軍隊を満洲に集結できるし、その用意もしている。これは日本軍を敗北させるのに必要な兵力の3倍である。来るべき戦争は、戦争というよりも単に軍事的散歩に過ぎない」と豪語し、8月には「戦争は日本上陸を以て終わるべきを固く確信する」と皇帝に奉上していた。

ロシアの日本軽視は海軍も同様で、明治36(1903)年4月に神戸沖の観艦式を見学した巡洋艦アスコリド艦長グラムマチコフ大佐は、「日本海軍は外国から艦艇を購入し、物質的装備だけは整えた。しかし、海軍軍人としての精神は到底われわれには及ばない。さらに、軍艦の操縦や運用に至っては極めて幼稚である」とローゼン駐日公使に語っていた。また、開戦2カ月前にアレクセーエフ極東総督は、面談した米アジア艦隊司令官エバンス少将の「日本との戦争になるか」との質問に、「戦うに及ばざるべし」と答え、さらに、エバンスが日本の戦力に付言すると、アレクセーエフは「それは紙上の勢力である」と放言していた。またロシア紙「ノヴォエ・ヴレミヤ」も「われわれに対する日

本の戦争は日本にとって自殺であろう。彼らの希望の総ての破壊となろう」と報じていた。

同盟国の英国の「デイリー・ニュース(1904年2月12日)」も、日本海軍の旅順港外の奇襲を、「日本がこれから何度も抜け目なく攻撃することは疑いない。しかし、我々は日本がワートルローに勝利するが、未だに確信が持てない」と報じていた。また、英国における日本擁護派の代表的ジャーナリストのアルフレッド・ステッドも「日本がちっぽけな国ではないということ、一般の人々に納得させることは不可能だった」「戦争前、また戦争当初においてさえも、もっとも友好的で楽観的な諸国民でも、日本が『北方の巨人』に対抗して立ち上がることはできないと考えずにはいらなかった。また、初期の日本海軍の勝利があっても、この懸念を払拭することはできなかった」「日本が戦争を始めた勇気も、自らの力を知ってというよりも、向こう見ずとみなされていた」と書くほど、日本海軍戦までは日本が勝利すると考えた国はなかったのである。